他者の存在が課題遂行に及ぼす影響の日韓比較

日野 佑美

他者の存在によって個人の行動が促進される現象を社会的促進 (social facilitation)、逆に抑制される現象を社会的抑制 (social inhibition) という。社会的促進・抑制の理論は欧米を中心にして発展してきた。しかし、この理論の文化的差異を指摘する研究もあれば、文化を問わずあてはまる理論だと述べる研究もあり、さらなる検討が求められるようになった。そのため、近年、社会的促進に関する異文化比較研究が見られるようになってきている。そこで、本研究は他者の存在が個人の課題遂行に与える影響について日本と韓国で比較検討することを目的とした。現代の日本社会ではアジアを中心とした異文化圏に属する他者と共同して作業にあたる場面が増えている。本研究は、そうしたグローバル化した現実の個人の作業効率向上に示唆を与えることにも役立つと考えられる。

仮説はそれぞれ、他者レベル高条件の方が他者レベル低条件よりも単純課題における促進効果、複雑課題における抑制効果が大きい(仮説 1)、他者レベル変化条件の方が他者レベル一定条件よりも課題遂行に与える影響が大きい(仮説 2)、日本では抑制効果が、韓国では促進効果が相対的に顕著である(仮説 3)であった。

実験デザインは国籍(日本・韓国)と他者存在条件(低-高・高-高・高-低・低-低・統制)が参加者間要因で、課題難易度(単純・複雑)が参加者内要因の、国籍 2×他者存在条件 5×課題難易度 2 の 3 要因計画であった。ひらがな 3 文字の動詞のペアからなる 27 問の記憶連想課題(単純課題 9 問、複雑課題 18 問)に取り組んでもらい、他者存在条件では練習試行 6 問(単純課題 2 問、複雑課題 4 問)の終了後と本試行 21 問(単純課題 7 問、複雑課題 14 問)の最中に成績のフィードバックを行った。そして、正解率と無反応率について分析を行った。その結果、日本では自己よりも優れた他者との共行為事態においてのみ複雑課題における抑制効果が見られた。一方、韓国では他者の能力に関わらず複雑課題における抑制効果が見られることが示された。また、全く一人で作業をする単独条件を設定すれば、日本では相手の能力に関わらず他者の存在が単純課題の遂行を促進し複雑課題の遂行を抑制すること、日本の方が韓国と比べて抑制効果が大きいことが見出せるかもしれないという可能性が示唆された。

本研究を現実の課題遂行場面に応用して考えると、集団の成員が日本人だけならば自己と同等な他者と一緒に作業にあたらせるか、もしくは他者の課題遂行量や能力が個人に対して明らかにされない状況を作り出すよう配慮することが効果的といえよう。そして、集団の成員が韓国人だけならば個人個人単独の条件で遂行にあたらせるのがよいだろう。また、日本人と韓国人の混在した集団状況で困難な課題に取り組ませるならば、日本人には他者の課題遂行の様子がわかるが、韓国人にはそれがわからないといった少々複雑な共行為事態を設定する必要があるかもしれない。

ただし、本研究では単独条件が設けられていなかったこと、そもそも記憶連想課題自体が社会的促進の検討に不向きであったことなどが問題点として考えられる。今後はそれらを修正した上で実験を行うことで、より明確な他者存在の課題遂行の促進・抑制効果を検討することができ、現実場面における有用性もより広がるであろう。(社会心理学)